慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古賀秀男著 チャーティスト運動の研究
Sub Title	Hideo Koga, Study of Chartist movement, Kyoto, 1975
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1975
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.68, No.11/12 (1975. 12) ,p.857(77)- 859(79)
JaLC DOI	10.14991/001.19751201-0077
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19751201-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



古賀秀男著

『チャーティスト運動の研究』

古賀さん、年来の努力の結晶ともいうべき「チャーティスト運動の研究」を御恵贈下され、ありがとう。 わたくしが、本書の出版を知ったのは、イギリスにおくられてきた日本の新聞の広告欄でしたが、いまこうして読むことができ、紹介させて戴くのは、一足先にこの問題を手がけた者として、何ともいえぬ感慨におそわれるものです。

いまから20年近く前に出た拙著「イギリス労働運動の生成」は、あなたの今回の力作の出現によって、まったくその役割を終えたということができます。そしてわたくしはそれで満足です。もともと「若さ」だけで書きなぐったような粗雑な研究ですし、当時は、あなたが日本で利用されているような史料にも乏しく、ほとんど第二次史料に依拠しているため、実証的にはもとより、論理構成も弱く、杉山忠平教授から、きびしい批判を賜わったのもいまはなつかしい想い出です。

1年6ヵ月の留学を終えたいま、ウォーリック大学 社会史研究所での1年3ヵ月、そしてロンドンでの3 ヵ月、その問題整理に忙しく、あなたの研究が、帰国 してはじめて読み了えた唯一の書物です。いま、わた くしはこの力作につけ加えるべき何ものももちません が、ただ「チャーティスト運動」ときいただけで、か つての恋人にばったり出会ったような胸のときめきを 覚えます。いまわたくしの研究題目は、チャーティス トから離れ、19世紀末から今世紀の20年代にかけての 社会政策や社会経済思想、そして最近では日本経済学 史の研究ですが、それでも、チャーティスト運動は、 つねにわたくしの深層心理に生きているような気がし ます。そこで、年来の友人としての関係から、読後感 などとともに、いくつかの問題で教えて戴けたらと思 い、筆をとった次第です。

本書は目次をみると、第1部チャーティスト運動の 成立、第2部チャーティスト運動とアイルランド問題、 そして第3部チャーティスト運動と社会主義。という 3つの大項目から成り、この点ではこの運動を年代史 的に叙述しようとする意図がうかがわれるとともに、 さらに中項目をみると、たとえば第2部第3章には、 「チャーティスト運動とアイルランド問題」,第4章「チャーティストの土地計画」,第5章「後期チャーティズムと社会主義」というように、問題史的に展開され、この両者の混合の形をとっていることが印象的です。これは、ひとつには、本書がいくつかの論文を基礎としているからですが、同時に、あなたがこの運動についてもっとも重要な関心を抱いている問題が、アイルランド問題、土地計画および社会主義が、チャーティストとどのようなかかわり合いを示すか、まさに本書のモティーフはここにあることをあらわしているといってもよいのではないでしょうか。そこで、当然、わたくしの質問も、この3つの問題にかかわらざるをえないわけです。

古賀さん、わたくしは、あなたの研究から実に多く のことを学びました。たとえば、アイルランド問題に ついては、アイルランド独立とチャーティスト運動を めぐる Daniel O'Connell と Feargus O'Connor との対 立の様相と、この両者の間にあってそのいずれにも批 判的な Bronterre O'Brien の思想, そして O'Connor とははげしい対立抗争の関係にあった William Lovett への O'Brien の微妙ともいえる接近, このなかで, 第 3章第3節ファーガス=オコナーとアイルランド問題 において、「オコナーの基本的立場は、イングランド とアイルランドの民衆は、共通の支配階級によって全 く同様に差別され経済的に搾取された破滅状態におか れており、この両者を分離・分断することは、民衆を 抑圧し支配している階級を援け増長させることにほか ならず、民衆が権利を獲得し解放をかちとるためには、 両者が共通の敵に対し、団結・連帯することこそ必要 な前提である、というものであった」(pp. 158~159) と され、さらに、第1インターナショナルにおけるマル クスのアイルランド問題に たいする態度にふれ、「オ コナーはまさしく国際的視点に立つプロレタリア的ア イルランド解放論の先覚者であったといえる」とのべ ていますが (pp.176~177), この点は問題です。O'Connor の立場が、主としてイングランドの運動に基礎を おくチャーティズムの達成がアイルランド解放の前提 条件をなしているという認識は、マルクスの見方とは やや異なるのではないでしょうか。すなわち、マルク スはあくまでも、アイルランド内部における革命的状 勢が激化し、民族運動の昂揚の結果として、強制併合 がなくなったとたんに、……社会革命がアイルランド で爆発し、「イギリス の 地主制度自体を 崩壊させる」 (pp. 176-177) としているのにたいし、O'Connor は、

アイルランドの民族運動の評価の点では、はるかにマ ルクスよりも悲観的であったのではないでしょうか。 もちろん, 1840年代の O'Connor と 1870年代の Marx とでは、アイルランド問題の認識の段階が異なること はいうまでもありませんが、O'Connorが、マルクスの ように、アイルランド農民の革命的蜂起に期待をかけ ていたとは考えられません。彼の土地計画は、こうし たアイルランドにおける革命の可能性にたいする見と おしの暗さと一脈の関係があるのです。その意味では、 O'Connor と Marx とのアイルランド革命についての 見方には、ある種の共通したものと同時に、相矛盾す る面ももつのです。マルクスのイデオロギーは明確で す。しかし O'Connor とは一体何者なのでしょうか。 そのイデオロギーは社会主義ではなく、さりとてブル ジョア・ラディカルでもなく、またたんなる民族主義 者でもありません。やはりチャーティストというほか に形容すべき言葉を見出しえないのです。その点から 「オコナーは まさしく 国際的視点に立つプロレタリア 的アイルランド解放論の先覚者」という規定のなかに, 彼がマルクスにみられるように、アイルランドについ て、「民族としての解放」と「プロレタリアートとし ての解放」とを結びつけていたのだと理解するとすれ ば、それは読みすぎであり、当らないと思います。そ してこの点は、彼の「土地計画」の構想と関連する間 題です。

古賀さん、わたくしは、あなたの克明な研究のなか で、もっとも興味深く読んだのはどの部分であると思 いますか。いうまでもなく、第3章チャーティスト運 動とアイルランド問題と第4章チャーティストの土地 計画です。とりわけ、土地計画について、これだけ詳細 な研究は、日本ではもちろん、イギリス本国でも少ない と思います。史料的な面ではまことに周到で、わたく しの批判の及ぶところではありませんが、この運動の 評価の点では、やや意見を異にします。わたくしも含 めて、従来の研究者は、O'Connor の土地計画の運動を 積極的に評価しようとせず、その消極面のみを強調し たことを指摘していますが (181頁), あなたはまたこ れとは対照的に、その明るい面だけを強調する叙述が 印象的です。たとえば、あなたは、O'Connorの土地計 画を、エンゲルスが高く評価したことをあげています が、しかしこの評価は後に、この計画の破綻とともに、 マルクスとエンゲルスによって修正されることは、ふ れておられるとおりです。この土地計画は、たしかに 古い歴史をもち、深刻な不況期には、海外への移民政 策とならんで、内国植民運動として提起され、19世紀 末に至るまで大恐慌の時期には、有効な失業対策とし て真剣にとりあげられたことは、たとえば José Harris の詳細な社会政策研究、Unemployment and Politics、 London、1972 によって明らかにされています。

古賀さん、もし O'Connor の土地計画が、たんに失 業対策として企図されたのだとすれば、それなりに理 論的根拠があり、これを「復古的」あるいは「時代錯誤 的」として批判することは間違っているかもしれませ ん。しかし問題は、O'Connorが、これによって、チャ ーターの獲得、すなわち男子普通選挙権の実現とこれ によってアイルランド人民の民族的解放を獲ちえよう としているところに問題があります。もしO'Connorが、 支配体制の転覆を願うのであれば、当然、アイルラン ドにおける地主・小作人関係の廃絶,同時にイングラ ンドにおける大土地所有制度の廃止を目標にせざるを えないはずです。より具体的には、アイルランドにお ける「闘う組織」としての農民団体の結成によって、 トーリーの支配に大打撃をあたえる方向です。「青年 アイルランド派」はまさしくそうした方針をとったも のと思われます。だが、O'Connorの土地計画には、そ うした解放の視点がきわめて稀薄なのです。あなたも いわれるように、労働市場での圧力緩和のための政策 としてはもちろん有意味ですが、精々2~3エーカー の小農民層の創出が、果してどれだけ 大地主制に 脅 威をあたえることが できるか、おそらく マルクスの 彼にたいする批判もこの点にあると考えられます。 O'Connor の本意は、1842 年以後、 深まる恐慌のなか で、失業者チャーティストの戦列からの離脱を防止す るための、きわめて生活防衛的な役割をこの運動に託 したものと思われます。

しかしそのような本音とはちがって、この運動に、それ以上の、民族的あるいはプロレタリア的な解放を期待しようとしたところに非常な無理があり、さまざまな批判や同志からの非難、あるいは分裂をよびおこしたのです。その点で、あなたの O'Connor 評価は、彼の人間性に魅せられる余り、その理論的混乱を正しく見抜くという点で甘いような気がしてなりません。最後に、1848年以後の後期チャーティストの問題に

最後に、1848年以後の後期チャーティストの問題に ついてのべましょうか。

古賀さん、あなたは、「チャーティスト運動とは何か」と問われたら、どのように答えますか。むづかしいですが、わたくしは、「1830年代の半ばから50年代初頭にかけ、イギリスにおこった男子普通選挙権獲得

をめざす革命的な大衆運動」というように規定したいと思います。その場合、イギリスという、当時、もっとも先進的で政治的意識に目覚めた労働者が、階級的に成熟していたという土壌が重要で、チャーティズムは、わたくしの意見では、イギリスに固有な運動と考えられます。これがとくにその後期の段階で国際的な民主主義運動と密接な関係をもつことは事実ですが、チャーティスト運動が国際的な運動の一環としてくみいれられる50年代半ば以後の時期は、48年以後とは質的に異なった段階ではないでしょうか。その意味で1847~1848 年恐慌とこれにつづくフランス2月革命は、ヨーロッパ史に一時期を画するものであり、チャーティズムの歴史にとって、これは決定的に重要な意義をもつものであると考えられるのです。

古賀さん、あなたは、わたくしが、1848年以後のチャーティストの動きを無視しもしくは軽視しているという 批判を されています (p. 262.註) が、わたくしは Jones や Harney の努力を軽視するものではなく、ただ1847~1848年の恐慌と フランス 2 月革命を、労働 運動史における時期区分の上で決定的に重要であると 考えるにすぎません。わたくしの旧著が、多くの先学 たちの古典的研究に依拠していることは事実ですが、ただこれらの人々の説を祖述するにとどまらず、1848年のイギリスを中心とするヨーロッパ資本主義発達史における重要性を示唆するものであったことです。

古賀さん、あなたとわたくしの間の重要な相違点は どこにあるのでしょうか。1848年前後を契機として、 イギリス産業構造の変化、繊維産業における手織業か ら機械生産への急速な推移と、これにともなう手織工 のいちじるしい減少という事実からして、チャーティ スト運動の担い手としての労働者の階層にも、大きな 変化がみられ、とくに40年代から50年代にかけて労働 組合運動がその勢力を伸張していくわけです。チャー ティスト運動の歴史を考える場合、たんに指導者間の イデオロギーの問題や組織上の対立のほかに、産業構 造の変化とこれにともなっておこる階層分化、さらに は労働者意識そのものの変化にも注目すべきではない でしょうか。その意味で、機械的に行うことは慎しま なければなりませんが、労働運動史、ひろく言って社 会史研究において時期区分は重要な意義を担うのです。 1848年以後の、いわゆる後期チャーティズムにおいて、 E. Jones や J. Harney の努力, その友愛民主協会を中心 とする活動には、チャーティスト運動の復活とさらに Chartism and something more を展望しながら、国際

的な運動への拡がりをもつものですが、果して、イギ リスの労働者の大衆は、どれほどこれについていった か、よくわかりません。あなたの克明な研究でも、こ の点はふれられていません。それゆえ、わたくしは、 1850年以後の運動は、Jones や Harney の努力にもか かわらず、いわばチャーティズムのエピローグである と考えるのです。総じてあなたの研究には、こうした 大衆と運動の指導者との関係が明確にのべられておら ず、指導者の群像の評価に焦点があてられているとい う特徴がみられます。十数年に及ぶ長い運動の道程で は、この運動の担い手にもいちじるしい変化があっ たはずです。とくに1840年代から50年代にかけては、 何か重要な変化がみられたのではないでしょうか。今 後のあなたの研究によって、この点が、明らかにされ るならば、私にとっても教えられるところ多く、期待 してやみません。

ともあれ、あなたの研究によって、イギリス社会史、 とくにわが国におけるチャーティズム研究が、国際的 にも比肩しうる水準に達したことを、わたくしは確信 します。イギリスから帰国して、1ヵ月がすぎました が、あなたの業績に接し、大きな喜びとともに、わた くし自身への励ましとしてうけとり、今後、研鑚をつ づけたいと思います。

(ミネルヴァ書房, 1975年3月, A5判402頁+vil, 4,200円) 飯 田 鼎 (経済学部教授)